新版（しんぱん）　指導要文集（しどうようもんしゅう）

日（ひ）めくりカレンダー365

御書別（ごしょべつ）

悪知識と申すは、甘くかたらい、詐り媚び、言を巧みにして、愚癡の人の心を取って善心を破るということなり。

（001唱法華題目抄10ページ－15行）

「菩薩は、悪象等においては心に恐怖なく、悪知識においては怖畏の心を生ず。悪象に殺されては三趣に至らず、悪友に殺されては必ず三趣に至る」

（002立正安国論29ページ－12行）

悪侶を誡めずんば、あに善事を成さんや。

（002立正安国論30ページ-11行）

しかず、彼の万祈を修せんよりは、この一凶を禁ぜんには。

（002立正安国論33ページ-13行）

蒼蠅、驥尾に附して万里を渡り、碧蘿、松頭に懸かって千尋を延ぶ。

（002立正安国論36ページ-9行）

早(はや)く天下(てんか)の静謐(せいひつ)を思(おも)わば、すべからく国中(こくちゅう)の謗法(ほうぼう)を断(た)つべし。

（002立正安国論(りっしょうあんこくろん)41ページー16行）

蘭室(らんしつ)の友(とも)に交(まじ)わって麻畝(まほ)の性(しょう)と成(な)る。

（002立正安国論(りっしょうあんこくろん)43ページー5行）

ただ我(わ)が信(しん)ずるのみにあらず、また他(た)の誤(あやま)りをも誡(いまし)めん

のみ。

（002 立正安国論45ページ-15行）

一念三千の法門は、ただ法華経の本門寿量品の文の底に沈しずめたり。竜樹・天親、知ってしかもいまだひろいいだ拾出さず。ただ我が天台智者のみ、これを懐いだけり。

（005 開目抄54ページ-9行）

世間の罪によって悪道に堕つる者は爪上の土、仏法によっ

て悪道に堕つる者は十方の土。俗より僧、女より尼、多く悪道に堕つべし。

（005開目抄69ページ－9行）

日蓮が法華経の智解は天台・伝教には千万が一分も及ぶことなけれども、難を忍び慈悲のすぐれたることはおそれをもいだきぬべし。

（005開目抄72ページ－13行）

今の世を見るに、日蓮より外の諸僧、たれの人か、法華経につけて諸人に悪口・罵詈せられ、刀杖等を加えらるる者ある。日蓮なくば、この一偈の未来記は妄語となりぬ。

（005開目抄73ページー2行）

今、法華経の時こそ、女人成仏の時悲母の成仏も顕れ、達多の悪人成仏の時慈父の成仏も顕るれ。この経は内典の孝経なり。

（005開目抄102ページー4行）

仏と提婆とは身と影とのごとし。生々にはなれず。聖徳太子と守屋とは蓮華の華菓同時なるがごとし。法華経の行者あらば、必ず三類の怨敵あるべし。

（005開目抄111ページ－10行）

「過去の因を知らんと欲せば、その現在の果を見よ。未来の果を知らんと欲せば、その現在の因を見よ」

（005開目抄112ページ－14行）

詮ずるところは、天もすて給え、諸難にもあえ、身命を期とせん。身子が六十劫の菩薩の行を退せし、乞眼の婆羅門の責めを堪えざるゆえ。久遠・大通の者の三・五の塵をふる、悪知識に値うゆえなり。善に付け悪につけ、法華経をすつるは地獄の業なるべし。

（005開目抄114ページ-1行）

我ならびに我が弟子、諸難ありとも疑う心なくば、自然に

仏界にいたるべし。天の加護なきことを疑わざれ。現世の安穏ならざることをなげかざれ。我が弟子に朝夕教えしかども、疑いをおこして皆すてけん。つたなき者のならいは、約束せし事をまことの時はわするるなるべし。

（005開目抄117ページ－7行）

夫れ、摂受・折伏と申す法門は、水火のごとし。火は水をいとう。水は火をにくむ。摂受の者は折伏をわらう。折伏の者は摂受をかなしむ。

無智・悪人の国土に充満の時は、摂受を前とす。安楽行品のごとし。邪智・謗法の者の多き時は、折伏を前とす。常不軽品のごとし。

（005 開目抄 118ページー17行）

「仏法を壊乱するは、仏法の中の怨なり。慈無くして詐り親しむは、これ彼が怨なり。能く糾治せんは、これ護法の声聞、真の我が弟子なり。彼がために悪を除くは、即ちこれ彼が親なり。能く呵責せんは、これ我が弟子なり。駆遣せ

ざらんは、仏法(ぶっぽう)の中(なか)の怨(あだ)なり」

（005開目抄(かいもくしょう)120ページー12行）

日蓮(にちれん)は日本国(にほんこく)のにしゆうし父母(主師親)なり。

（005開目抄(かいもくしょう)121ページー6行）

皆(みな)、法華経(ほけきょう)のゆえなればはじならず。愚人(ぐにん)にほめられ(褒)たるは第一(だいいち)のはじ(恥)なり。

（005開目抄(かいもくしょう)121ページー11行）

仏法は時によるべし。日蓮が流罪は今生の小苦なればなげかしからず。後生には大楽をうくべければ大いに悦ばし。

（005 開目抄 121ページー15行）

観心とは、我が己心を観じて十法界を見る、これを観心と云うなり。譬えば、他人の六根を見るといえども、いまだ自面の六根を見ざれば自具の六根を知らず、明鏡に向かうの時、始めて自具の六根を見るがごとし。

（006 如来滅後五五百歳始観心本尊抄 125ページ－6行）

釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華経の五字に具足す、我らこの五字を受持すれば、自然に彼の因果の功徳を譲り与えたもう。

（006 如来滅後五五百歳始観心本尊抄 134ページ－17行）

上行・無辺行・浄行・安立行等は我らが己心の菩薩なり。

（006 如来滅後五五百歳始観心本尊抄135ページ-14行）

在世の本門と末法の初めは一同に純円なり。ただし、彼は脱、これは種なり。彼は一品二半、これはただ題目の五字なり。

（006 如来滅後五五百歳始観心本尊抄139ページ-9行）

正像に無き大地震・大彗星等出来す。これらは金翅鳥・修羅・竜神等の動変にあらず。ひとえに四大菩薩出現せし

むべき先兆なるか。天台云わく「雨の猛きを見て竜の大なるを知り、華の盛んなるを見て池の深きを知る」等云々。

（006 如来滅後五五百歳始観心本尊抄146ページ－12行）

天晴れぬれば地明らかなり。法華を識る者は世法を得べきか。

（006 如来滅後五五百歳始観心本尊抄146ページ－15行）

一念三千を識らざる者には、仏、大慈悲を起こし、五字の

内にこの珠を裏み、末代幼稚の頸に懸けしめたもう。

（006 如来滅後五五百歳始観心本尊抄 146ページ-16行）

諸病の中には法華経を謗ずるが第一の重病なり。諸薬の中には南無妙法蓮華経は第一の良薬なり。

（008 法華取要抄 155ページ-1行）

逆縁のためには、ただ妙法蓮華経の五字に限るのみ。例せば不軽品のごとし。我が門弟は順縁なり。日本国は逆縁な

り。

（008 法華取要抄 156ページー9行）

夫れ、仏法を学せん法は、必ずまず時をならうべし。

（009 撰時抄 160ページー7行）

彼の白法隠没の次には、法華経の肝心たる南無妙法蓮華経の大白法の、一閻浮提の内八万の国あり、その国々に八万の王あり、王々ごとに臣下ならびに万民までも、今日本国に

弥陀称名を四衆の口々に唱うるがごとく広宣流布せさせ給うべきなり。

（009撰時抄164ページ－4行）

今、末法に入って二百余歳、大集経の「我が法の中において闘諍言訟して白法隠没せん」の時にあたれり。仏語まことならば、定めて一閻浮提に闘諍起こるべき時節なり。

（009撰時抄172ページ－13行）

日蓮は閻浮第一の法華経の行者なり。これをそしり、これをあだむ人を結構せん人は、閻浮第一の大難にあうべし。

（009撰時抄175ページ－5行）

日蓮が法華経を信じ始めしは、日本国には一渧一微塵のごとし。法華経を二人・三人・十人・百千万億人唱え伝うるほどならば、妙覚の須弥山ともなり、大涅槃の大海ともなるべし。仏になる道は、これよりほかに、またもとむることなかれ。

我が弟子等、心みに法華経のごとく身命もおしまず修行して、この度仏法を心みよ。

（009撰時抄205ページ-9行）

夫れ、老狐は塚をあとにせず、白亀は毛宝が恩をほうず。畜生すら、かくのごとし。いおうや人倫をや。

（010報恩抄212ページ-7行）

（009撰時抄210ページ-1行）

仏教(ぶっきょう)をならわん者(もの)の、父母(ふぼ)・師匠(ししょう)・国恩(こくおん)をわするべしや。

この大恩(だいおん)をほうぜんには、必(かなら)ず仏法(ぶっぽう)をならい極(きわ)め智者(ちしゃ)となら(習)で叶(かな)うべきか。

（010 報恩抄(ほうおんしょう) 212ページ-9行）

浅(あさ)きは易(やす)く深(ふか)きは難(かた)しとは、釈迦(しゃか)の所判(しょはん)なり。浅(あさ)きを去(さ)って深(ふか)きに就(つ)くは、丈夫(じょうぶ)の心(こころ)なり。

（010 報恩抄(ほうおんしょう) 235ページ-12行）

日本乃至漢土・月氏・一閻浮提に、人ごとに有智・無智をきらわず一同に他事をすてて南無妙法蓮華経と唱うべし。このことい まだひろまらず。一閻浮提の内に仏の滅後二千二百二十五年が間、一人も唱えず。日蓮一人、南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経等と声もおしまず唱うるなり。

（010 報恩抄 261ページー4行）

日蓮(にちれん)が慈悲(じひ)曠大(こうだい)ならば、南無妙法蓮華経(なんみょうほうれんげきょう)は万年(まんねん)の外未来(ほかみらい)までもながるべし(流)。日本国(にほんこく)の一切衆生(いっさいしゅじょう)の盲目(もうもく)をひらける功徳(くどく)(開)あり。無間地獄(むけんじごく)の道(みち)をふさぎぬ(塞)。

（010 報恩抄(ほうおんしょう) 261ページ－10行）

極楽百年(ごくらくひゃくねん)の修行(しゅぎょう)は穢土(えど)の一日(いちにち)の功(く)に及(およ)ばず。

（010 報恩抄(ほうおんしょう) 261ページ－12行）

法華経(ほけきょう)にすぎたる仏(ほとけ)になる大道(だいどう)はなかるべきなり。

（過(すぎ)成(なり)）

（014 本尊問答抄 314ページ-6行）

妙法蓮華経と唱え持つというとも、もし己心の外に法ありと思わば、全く妙法にあらず、麤法なり。

（015 一生成仏抄 316ページ-13行）

「衆生の心けがるれば土もけがれ、心清ければ土も清し」とて、浄土といい穢土というも、土に二つの隔てなし、ただ我らが心の善悪によると見えたり。衆生というも仏とい

うも、またかくのごとし。迷う時は衆生と名づけ、悟る時をば仏と名づけたり。譬えば、闇鏡も磨きぬれば玉と見ゆるがごとし。

（015 一生成仏抄 317ページー11行）

一念無明の迷心は磨かざる鏡なり。これを磨かば、必ず法性真如の明鏡と成るべし。

深く信心を発して、日夜朝暮にまた懈らず磨くべし。いかようにしてか磨くべき。ただ南無妙法蓮華経と唱えたて

まつるを、これをみがくとはいうなり。（015 一生成仏抄317ページ14行）

仏教は必ず国によってこれを弘むべし。（028 教機時国抄479ページ9行）

すべからく汝仏にならんと思わば、慢のはたほこをたおし、忿りの杖をすてて、ひとえに一乗に帰すべし。名聞名利は今生のかざり、我慢偏執は後生のほだしなり。ああ、

恥ずべし恥ずべし、恐るべし恐るべし。

（030 持妙法華問答抄 513ページ－5行）

受けがたき人身をうけ、値いがたき仏法にあいて、いかでか虚しくて候べきぞ。

（030 持妙法華問答抄 514ページ－8行）

されば、持たるる法だに第一ならば、持つ人随って第一なるべし

（030　持妙法華問答抄　516ページ－5行）

すべからく、心を一にして南無妙法蓮華経と我も唱え他をも勧めんのみこそ、今生人界の思い出なるべき。

（030　持妙法華問答抄　519ページ－5行）

仏道に入る根本は信をもって本とす。

（033　法華経題目抄（妙の三義の事）　532ページ－12行）

女人は在世・正像末、総じて一切の諸仏の一切経の中に、法華経をはなれて仏になるべからず。

（033 法華経題目抄（妙の三義の事）542ページー1行）

妙とは蘇生の義なり。蘇生と申すは、よみがえる義なり。

（033 法華経題目抄（妙の三義の事）541ページー5行）

仏法はあながちに人の貴賤には依るべからず、ただ経文を先とすべし。身の賤しきをもって、その法を軽んずることな

かれ。

（034 聖愚問答抄上 555ページ－5行）

已来、知恩をもって最とし、報恩をもって前とす。世に四恩あり。これを知るを人倫となづけ、知らざるを畜生とす。

（034 聖愚問答抄上 569ページ－8行）

一遍この首題を唱え奉れば、一切衆生の仏性が皆よばれてここに集まる時、我が身の法性の法報応の三身とともに

引

ひかれて顕れ出ずる、これを成仏とは申すなり。例せば、籠の内にある鳥の鳴く時、空を飛ぶ衆鳥の同時に集まる、これを見て籠の内の鳥も出でんとするがごとし。

（034聖愚問答抄上578ページ－11行）

法華経の法理を教えん師匠も、また習わん弟子も、久しからずして法華経の力をもって、ともに仏になるべし

（034聖愚問答抄上580ページ－13行）

この妙法蓮華経を信仰し奉る一行に、功徳として来らざることなく、善根として動かざることなし。

（034 聖愚問答抄上 581ページ－2行）

法華経の行者の祈る祈りは、響きの音に応ずるがごとし。影の体にそえるがごとし。すめる水に月のうつるがごとし。方諸の水をまねくがごとし。磁石の鉄をすうがごとし。琥珀の塵をとるがごとし。あきらかなる鏡の物の色をうかぶるがごとし。

（035 祈禱抄587ページ-5行）

大地はささばはずるとも、虚空をつなぐ者はありとも、潮のみちひぬことはありとも、日は西より出ずるとも、法華経の行者の祈りのかなわぬことはあるべからず。

（035 祈禱抄592ページ-15行）

仏法を修行せんには人の言を用いるべからず。ただ仰いで仏の金言をまぼるべきなり。

（036 如説修行抄 601ページ-10行）

末法の始めの五百年には純円一実の法華経のみ広宣流布の時なり。

（036 如説修行抄 603ページ-3行）

一乗流布の時は、権教有って敵と成ってまぎらわしくば、実教よりこれを責むべし。これを、摂折二門の中には、法華経の折伏と申すなり。

（036 如説修行抄603ページ－6行）

されば、末法今の時、法華経の折伏の修行をば、誰か経文のごとく行じ給えしぞ。誰人にても坐せ、「諸経は無得道、堕地獄の根源、法華経独り成仏の法なり」と、音も惜しまずよばわり給いて、諸宗の人法共に折伏して御覧ぜよ。三類の強敵来らんこと疑いなし。

（036 如説修行抄603ページ－12行）

一期を過ぐること、程も無ければ、いかに強敵重なるとも、ゆめゆめ退する心なかれ、恐るる心なかれ。

（036 如説修行抄 605ページ－1行）

四味三教等の邪執を捨てて実大乗の法華経に帰せば、諸天善神ならびに地涌千界等の菩薩、法華の行者を守護せん。この人は、守護の力を得て、本門の本尊・妙法蓮華経の五字をもって閻浮提に広宣流布せしめんか。

（037 顕仏未来記 608ページ－15行）

一妙真如の理なりといえども、悪縁に遇えば迷いと成り、善縁に遇えば悟りと成る。悟りは即ち法性なり。迷いは即ち無明なり。

（038 当体義抄 614ページ－2行）

正直に方便を捨てて、ただ法華経を信じ、南無妙法蓮華経と唱うる人は、煩悩・業・苦の三道、法身・般若・解脱の三徳と転じて、三観・三諦即ち一心に顕れ、その人の所住

の処は常寂光土なり。

（038 当体義抄 617ページー1行）

一切衆生のみならず、十界の依正の二法、非情の草木、一微塵にいたるまで、皆十界を具足せり。

（040 小乗大乗分別抄 632ページー1行）

「法に依って人に依らざれ。義に依って語に依らざれ。智に依って識に依らざれ。了義経に依って不了義経に依らざれ」

（048 法華初心成仏抄 686ページー8行）

已今当の三説の中に、仏になる道は法華経に及ぶ経なし」と云うことは、正しき仏の金言なり。

（048 法華初心成仏抄 688ページー7行）

仏になる法華経を耳にふれぬれば、これを種として必ず仏になるなり。

（048 法華初心成仏抄 697ページー10行）

とてもかくても法華経を強いて説き聞かすべし。信ぜん人は仏になるべし。謗ぜん者は毒鼓の縁となって仏になるべきなり。いかにとしても、仏の種は法華経より外になきなり。

（048 法華初心成仏抄 697ページ－14行）

口に南無妙法蓮華経と唱え奉る女人は、在世の竜女・憍曇弥・耶輸陀羅女のごとくに、やすやすと仏になるべし

という経文なり。

（048 法華初心成仏抄700ページ－6行）

およそ妙法蓮華経とは、我ら衆生の仏性と、梵王・帝釈等の仏性と、舎利弗・目連等の仏性と、文殊・弥勒等の仏性と、三世の諸仏の解りの妙法と一体不二なる理を、妙法蓮華経と名づけたるなり。

（048 法華初心成仏抄703ページ－14行）

我が己心の妙法蓮華経を本尊とあがめ奉って、我が己心中の仏性、南無妙法蓮華経とよびよばれて顕れ給うところを仏とは云うなり。譬えば、籠の中の鳥なけば、空とぶ鳥のよばれて集まるがごとし。空とぶ鳥の集まれば、籠の中の鳥も出でんとするがごとし。口に妙法をよび奉れば、我が身の仏性もよばれて必ず顕れ給う。

（048 法華初心成仏抄 704ページ-2行）

八万四千の法蔵は我が身一人の日記文書なり。この

八万法蔵を我が心中に孕み持ち、懐き持ちたり。我が身中の心をもって、仏と法と浄土とを我が身より外に思い願い求むるを迷いとは云うなり。この心が、善悪の縁に値って善悪の法をば造り出だせるなり。

049 三世諸仏総勘文教相廃立（総勘文抄）713ページ－13行）

大悪口・大瞋恚を生じて大願を成就し、賢子をもうけ給いぬ。当に知るべし、瞋恚は善悪に通ずるものなり。

（050 諌暁八幡抄742ページ-1行）

涅槃経に云わく「一切衆生の異の苦を受くるは、ことごとくこれ如来一人の苦なり」等云々。

（050 諌暁八幡抄745ページ-9行）

南無妙法蓮華経と申す人をば、大梵天・帝釈・日月・四天等、昼夜に守護すべしと見えたり。

（050 諌暁八幡抄747ページ-6行）

各々用心有るべし。少しも妻子・眷属を憶うことなかれ、権威を恐るることなかれ。今度、生死の縛を切って仏果を遂げしめ給え。

（075 弟子檀那中への御状 866ページー9行）

聖人の国に在るは、日本国の大喜にして、蒙古国の大憂なり。

（081 滝泉寺大衆陳状 881ページー3行）

『一切法』とは、一切皆これ仏法なり。

（091 上行菩薩結要付嘱口伝 973ページ-14行）

「帰」とは我らが色法なり。「命」とは我らが心法なり。色心不二なるを一極と云うなり。

（095 御義口伝 984ページ-10行）

声、仏事をなす。

（095御義口伝985ページー1行）

今、日蓮等の類いは、無問自説なり。「念仏無間、禅天魔、真言亡国、律国賊」と喚ぶことは、無問自説なり。三類の強敵の来ることは、この故なり。

（095御義口伝992ページー2行）

我らが頭は妙なり。喉は法なり。胸は蓮なり。胎は華なり。

足は経なり。この五尺の身、妙法蓮華経の五字なり。

（095御義口伝997ページー7行）

今、日蓮が唱うるところの南無妙法蓮華経は、末法一万年の衆生まで成仏せしむるなり。

（095御義口伝1004ページー8行）

一念三千も「信」の一字より起こり、三世の諸仏の成道も「信」の一字より起こるなり。この「信」の字、元品の無明

を切る利剣なり。

（095御義口伝1011ページー17行）

「信」は、「疑いなきを『信』と曰う」とて、疑惑を断破する利剣なり。「解」とは、智慧の異名なり。「信」は価のごとく、「解」は宝のごとし。三世の諸仏の智慧をかうは「信」の一字なり。

（095御義口伝1012ページー1行）

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と信受・領納する故に、「無上宝聚　不求自得（無上の宝聚は、求めざるに自ずから得たり）」の大宝珠を得るなり。信は智慧の種なり、不信は堕獄の因なり。

（095　御義口伝　1012ページー5行）

日本国の一切衆生は「子」のごとく、日蓮は「父」のごとし。法華不信の失によって無間大城に堕ちて、返って日蓮を恨みん。また日蓮も、音も惜しまず法華を捨つべからずと

云うべきものを、霊山にて悔ゆることこれ有るべきか。

（095御義口伝1013ページ－5行）

「宝聚」とは、三世の諸仏の万行万善・諸波羅蜜の宝を聚めたる南無妙法蓮華経なり。この無上宝聚を、辛労も無く行功も無く、一言に受け取る信心なり。「不求自得」とは、これなり。

（095御義口伝1014ページ－10行）

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、化城即宝処なり。我らが居住の山谷曠野、皆、皆常寂光の宝処なり

（095御義口伝1024ページー3行）

「大願」とは、法華弘通なり。

（095御義口伝1027ページー4行）

「四面」とは、生老病死なり。四相をもって我らが一身の

塔を荘厳するなり。我らが生老病死に南無妙法蓮華経と唱え奉るは、しかしながら「四徳の香を吹く」なり。

（095御義口伝1031ページ-13行）

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉るを、当体蓮華の仏と云うなり云々。

（095御義口伝1032ページ-12行）

この法華経を持つ者は、難に値わんと心得て持つなり。さ

れば、「則為疾得　無上仏道（則ちこれ疾く無上の仏道を得ん）」の成仏は、今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る、これなり云々。

（095御義口伝1035ページー7行）

「師子吼」とは、仏の説なり。説法とは法華、別しては南無妙法蓮華経なり。

「師」とは師匠授くるところの妙法、「子」とは弟子受くるところの妙法、「吼」とは師弟共に唱うるところの

音声(おんじょう)なり。

（095 御義口伝(おんぎくでん) 1043ページ-2行）

「如法修行(にょほうしゅぎょう)」の人(ひと)とは、天台(てんだい)・妙楽(みょうらく)・伝教(でんぎょう)等(とう)なり。今(いま)、日蓮(にちれん)等(とう)の類(たぐ)い、南無妙法蓮華経(なんみょうほうれんげきょう)と唱(とな)え奉(たてまつ)るは、「如法修行(にょほうしゅぎょう)」なり云々(うんぬん)。

（095 御義口伝(おんぎくでん) 1043ページ-6行）

「悪鬼(あっき)」とは、法然(ほうねん)・弘法等(こうぼうとう)これなり。「入其身(にゅうごしん)」とは、国王(こくおう)・

大臣・万民等のことなり。

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者を、怨むべしということなり。「鬼」とは、「奪命者（命を奪う者）」にして、「奪功徳者（功徳を奪う者）」と云うなり。

（095御義口伝1044ページ－7行）

今、日蓮等の類いの修行は、妙法蓮華経を修行するに、難来るをもって安楽と意得べきなり。

（095御義口伝1045ページ－4行）

この本法を受持するは、信の一字なり。元品の無明を対治する利剣は、信の一字なり。

（095御義口伝1047ページー10行）

無作の三身とは、末法の法華経の行者なり。無作の三身の宝号を、「南無妙法蓮華経」と云うなり。

（095御義口伝1048ページー11行）

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、一切衆生の父なり。無間地獄の苦を救う故なり云々。

（095御義口伝1056ページー12行）

「久遠」とは、はたらかさず、つくろわず、もとのままという義なり。

（095御義口伝1058ページー12行）

修行とは、「無疑曰信（疑いなきを信と曰う）」の信心のこ

となり。

（095御義口伝1059ページー2行）

「信」のところに「解」あり、「解」のところに「信」あり。しかりといえども、「信」をもって成仏を決定するなり。

（095御義口伝1060ページー10行）

悪を滅するを「功」と云い、善を生ずるを「徳」と云うなり。「功徳」とは、即身成仏なり。また「六根清浄」なり。

（095御義口伝1062ページ-12行）

「娑婆（しゃば）」とは、堪忍世界（かんにんせかい）と云（い）うなり

（095御義口伝1073ページ-17行）

法華経（ほけきょう）を持（たも）ち奉（たてまつ）るをもって一切（いっさい）の孝養（こうよう）の最頂（さいちょう）とせり。

（095御義口伝1077ページ-15行）

桜梅桃李（おうばいとうり）の己々（ここ）の当体（とうたい）を改（あらた）めずして無作（むさ）の三身（さんじん）と開見（かいけん）す

れば、これ即ち「量」の義なり。

（095御義口伝1090ページ-9行）

南無妙法蓮華経と唱え奉るは、自身の宮殿に入るなり。

（095御義口伝1095ページ-5行）

始めて我が心本来の仏なりと知るを、即ち「大歓喜」と名づく。いわゆる、南無妙法蓮華経は歓喜の中の大歓喜なり。

（095御義口伝1097ページ-1行）

一念に億劫の辛労を尽くせば、本来無作の三身念々に起こるなり。いわゆる南無妙法蓮華経は精進行なり。

（095御義口伝1099ページー16行）

宝塔も妙法蓮華経の五字より外はこれ無きなり。妙法蓮華経を見れば、宝塔即ち一切衆生、一切衆生即ち南無妙法蓮華経の全体なり

（095御義口伝1111ページー9行）

父母の成仏は、即ち子の成仏なり。子の成仏は、即ち父母の成仏なり。

（096 御講聞書 1130ページー8行）

法華経に値い奉って南無妙法蓮華経と唱え奉る時、煩悩即菩提・生死即涅槃と体達するなり。

（096 御講聞書 1139ページー13行）

聞く故に持ち奉る、持ち奉るが故に三類の強敵来る。来るをもって「現世安穏」の記文顕れたり。

（096御講聞書1148ページー1行）

詮ずるところ、法華経を弘むるをもって「現世安穏、後生善処」と申すなり云々。

（096御講聞書1148ページー8行）

随喜するは信心なり。信心するは随喜なり。一念三千の法門

は、信心・随喜の函に納まりたり。

（096御講聞書1163ページ-3行）

下種とは、たねを下ろすなり。種子とは、成仏の種のことなり。

（096御講聞書1167ページ-7行）

水のごとき行者と申すは、水は昼夜不退に流るるなり。少しもやむことなし。そのごとく法華経を信ずるを水の行者

とは云うなり云々。

（096 御講聞書 1173ページ－6行）

当世牛馬のごとくなる智者どもが、日蓮が法門をかりそめにも毀るは、糞犬が師子王をほえ、癡猿が帝釈を笑うに似たり。

（097 善無畏三蔵抄 1194ページ－17行）

既に経文のごとく「悪口・罵詈」「刀杖・瓦礫」「しばしば

擯出せられん」と説かれて、かかるめに値い候こそ法華経をよむにて候らめと、いよいよ信心もおこり、後生もたのもしく候。

（098 佐渡御勘気抄 1195ページー12行）

よき弟子をもつときんば、師弟仏果にいたり、あしき弟子をたくわいぬれば、師弟地獄におつといえり。師弟相違せば、なに事も成すべからず。

（103 華果成就御書 1211ページー2行）

各々我が弟子となのらん人々は、一人もおくしおもわるべからず。

（107種々御振舞御書1227ページ－5行）

各々思い切り給え。この身を法華経にかうるは、石に金をかえ、糞に米をかうるなり。

（107種々御振舞御書1227ページ－9行）

一丈のほりをこえぬもの、十丈二十丈のほりをこうべきか。

（107種々御振舞御書1229ページ－16行）

今、日蓮は、末法に生まれて妙法蓮華経の五字を弘めてかかるせめにあえり。仏滅度して後二千二百余年が間、恐らくは天台智者大師も「一切世間に怨多くして信じ難し」の経文をば行じ給わず。「しばしば擯出せられん」の明文は、ただ日蓮一人なり。

（107種々御振舞御書1235ページ－4行）

「行解既に勤めぬれば、三障四魔、紛然として競い起こる」

（107種々御振舞御書1235ページ－11行）

釈迦如来の御ためには提婆達多こそ第一の善知識なれ。今の世間を見るに、人をよくなすものは、かたうどよりも強敵が人をばよくなしけるなり。

（107種々御振舞御書1236ページ－6行）

病の起こりを知らざる人の病を治せば、いよいよ病は倍増すべし。

（107 種々御振舞御書 1241ページー14行）

鹿は味ある故に人に殺され、亀は油ある故に命を害せらる。女人はみめ形よければ嫉む者多し。国を治むる者は他国の恐れあり。財有る者は命危うし。法華経を持つ者は必ず成仏し候

（107 種々御振舞御書 1246ページー16行）

法華経を信ずる人は、かまえてかまえて法華経のかたきをおそれさせ給え。念仏者と持斎と真言師と、一切南無妙法蓮華経と申さざらん者をば、いかに法華経をよむとも法華経のかたきとしろしめすべし。かたきをしらねば、かたきにたぼらかされ候ぞ。

（108 光日房御書 1255ページー2行）

夫れ、人身をうくることはまれなるなり。すでにまれなる人身をうけたり。また、あいがたきは仏法、これもまたあえり。同じ仏法の中にも法華経の題目にあいたてまつる。結句、題目の行者となれり。まことにまことに過去十万億の諸仏を供養する者なり。

（113 寂日房御書 1268ページー17行）

日蓮は日本第一の法華経の行者なり。すでに勧持品の二十行の偈の文は、日本国の中には日蓮一人よめり。

（113 寂日房御書 1269ページー3行）

命限り有り、惜しむべからず。ついに願うべきは仏国なり

（121 富木入道殿御返事（願望仏国の事） 1283ページー11行）

仏説いて云わく「七宝をもって三千大千世界に布き満つるとも、手の小指をもって仏経に供養せんにはしかず」取意。

雪山童子の身をなげし、楽法梵志が身の皮をはぎし、身命に過ぎたる惜しきもののなければ、これを布施として

仏法を習えば必ず仏となる。

（122佐渡御書1284ページー13行）

男子ははじに命をすて、女人は男のために命をすつ。

（122佐渡御書1285ページー2行）

世間の浅きことには身命を失えども、大事の仏法なんどには捨つること難し。故に仏になる人もなかるべし。

（122佐渡御書1285ページー6行）

仏法は摂受・折伏時によるべし。譬えば、世間の文武二道のごとし。

（122佐渡御書1285ページー8行）

畜生の心は、弱きをおどし、強きをおそる。当世の学者等は畜生のごとし。智者の弱きをあなずり、王法の邪をおそる。諛臣と申すはこれなり。

（122佐渡御書1285ページー16行）

強敵を伏して始めて力士をしる。

悪王の正法を破るに、邪法の僧等が方人をなして智者を失わん時は、師子王のごとくなる心をもてる者、必ず仏になるべし。

（122佐渡御書1285ページー17行）

おごれる者は、必ず、強敵に値っておそるる心出来するなり。例せば、修羅のおごり、帝釈にせめられて、無熱池

の蓮の中に小身と成って隠れしがごとし。

（122佐渡御書1286ページ－4行）

正法は、一字一句なれども、時機に叶いぬれば必ず得道なるべし。千経万論を習学すれども、時機に相違すれば叶うべからず。

（122佐渡御書1286ページ－5行）

外道・悪人は如来の正法を破りがたし。仏弟子等、必ず

仏法を破るべし。「師子身中の虫の師子を食む」等云々。

（122佐渡御書1286ページー7行）

心は法華経を信ずる故に梵天・帝釈をもなお恐ろしと思わず。

（122佐渡御書1287ページー12行）

鉄は炎い打てば剣となる。賢聖は罵詈して試みるなるべし。

（122佐渡御書1288ページ－1行）

日蓮は過去の不軽のごとく、当世の人々は彼の軽毀の四衆のごとし。人は替われども因はこれ一なり。父母を殺せる人異なれども、同じ無間地獄におつ。いかなれば、不軽の因を行じて日蓮一人釈迦仏とならざるべき。

（122佐渡御書1290ページ－14行）

日蓮を信ずるようなりし者どもが、日蓮がかくなれば、疑

いをおこして法華経をすつるのみならず、かえりて日蓮を教訓して我賢しと思わん僻人等が、念仏者よりも久しく阿鼻地獄にあらんこと、不便とも申すばかりなし。

（122 佐渡御書 1291ページー3行）

各々我が弟子たらん者は深くこの由を存ぜよ。たとい身命に及ぶとも退転することなかれ。

（127 法華行者逢難事 1304ページー3行）

命と申す物は一身第一の珍宝なり。一日なりともこれをのぶるならば、千万両の金にもすぎたり。法華経の一代の聖教に超過していみじきと申すは、寿量品のゆえぞかし。

（130可延定業書1308ページー9行）

一日の命は三千界の財にもすぎて候なり。まず御志をみみえさせ給うべし。

（130可延定業書1309ページー5行）

日蓮はこれ法華経の行者なり。不軽の跡を紹継するの故に。軽毀する人は頭七分に破れ、信ずる者は福を安明に積まん。

（133 聖人知三世事 1314ページー16行）

身を挙ぐれば慢ずと想い、身を下せば経を蔑る。松高ければ藤長く、源深ければ流れ遠し。幸いなるかな、楽しいかな。穢土において喜楽を受くるは、ただ日蓮一人なるのみ。

（133 聖人知三世事 1315ページー9行）

やのはしることは弓のちから、くものゆくことはりゅうのちから、おとこのしわざはめのちからなり。

（134 富木尼御前御返事 1316ページ－7行）

我が門家は、夜は眠りを断ち昼は暇を止めてこれを案ぜよ。一生空しく過ごして万歳悔ゆることなかれ。

（137 富木殿御書（止暇断眠御書） 1324ページ－8行）

法華宗の心は一念三千なり。性悪・性善、妙覚の位になお備われり。元品の法性は梵天・帝釈等と顕れ、元品の無明は第六天の魔王と顕れたり。

（139 治病大小権実違目 1331ページー12行）

世間には日本第一の貧しき者なれども、仏法をもって論ずれば一閻浮提第一の富める者なり。

（141 四菩薩造立抄 1339ページー15行）

生死(しょうじ)の長夜(じょうや)を照(て)らす大灯(だいとう)、元品(がんぽん)の無明(むみょう)を切(き)る利剣(りけん)は、この法門(ほうもん)に過(す)ぎざるか。

（145 諸経(しょきょう)と法華経(ほけきょう)と難易(なんい)の事(こと) 1345ページ－6行）

仏法(ぶっぽう)は体(たい)のごとし、世間(せけん)はかげ(影)のごとし。体曲(たいま)がれば影(かげ)斜(な)めなり。

（145 諸経(しょきょう)と法華経(ほけきょう)と難易(なんい)の事(こと) 1346ページ－10行）

涅槃経(ねはんぎょう)に転重軽受(てんじゅうきょうじゅ)と申(もう)す法門(ほうもん)あり。先業(せんごう)の重(おも)き今生(こんじょう)につ尽

きずして、未来に地獄の苦を受くべきが、今生にかかる重苦に値い候えば、地獄の苦しみぱっときえて死に候えば、人天・三乗・一乗の益をうること候。

（150 転重軽受法門 1356ページ－8行）

「この経は則ちこれ閻浮提の人の病の良薬なり。もし人病有らんに、この経を聞くことを得ば、病は即ち消滅して、不老不死ならん」

（151 太田入道殿御返事 1360ページ－6行）

この経の文字は、盲眼の者はこれを見ず、肉眼の者は文字と見る、二乗は虚空と見る、菩薩は無量の法門と見る。仏は一々の文字を金色の釈尊と御覧あるべきなり。「即ち仏身を持つ」とは、これなり。

（163 曽谷入道殿御返事（文字即仏の事）1411ページー9行）

「心の師とはなるとも、心を師とせざれ」とは、六波羅蜜経の文ぞかし。

（163 曽谷入道殿御返事（文字即仏の事）1411ページ－12行）

今度、法華経に信心をとるべき。信なくしてこの経を行ぜんは、手なくして宝山に入り、足なくして千里の道を企つるがごとし。

ただし、近き現証を引いて遠き信を取るべし。

（164 法蓮抄 1418ページ－13行）

いわゆる、地獄の一人、餓鬼の一人、乃至九界の一人を仏

になせば、一切衆生皆仏になるべきことわり顕る。譬えば、竹の節を一つ破りぬれば、余の節また破るるがごとし。

（164 法蓮抄 1420ページ－11行）

涅槃経に云わく「もし善比丘あって、法を壊る者を見て、置いて、呵責し駆遣し挙処せずんば、当に知るべし、この人は仏法の中の怨なり。もし能く駆遣し呵責し挙処せば、これ我が弟子、真の声聞なり」云々。この文の中に、「法を壊る者を見て」の「見て」と、「置いて、呵責せずんば」の「置い

て」とを能く能く心腑に染むべきなり。法華経の敵を見ながら、置いてせめずんば、師檀ともに無間地獄は疑いなかるべし。

（165 曽谷殿御返事（成仏用心抄）1434ページー15行）

いたるところの諸仏の土に、常に師とともに生ず

（165 曽谷殿御返事（成仏用心抄）1435ページー6行）

この法門を日蓮申す故に、忠言耳に逆らう道理なるが故に、

流罪せられ、命にも及びしなり。しかれども、いまだこりず候。

（165 曽谷殿御返事（成仏用心抄）1435ページ－14行）

「いたるところの諸仏の土に、常に師とともに生ず」「もし法師に親近せば、速やかに菩提の道を得、この師に随順して学せば、恒沙の仏を見たてまつることを得ん」

（169 秋元殿御返事 1456ページ－9行）

種・熟・脱の法門、法華経の肝心なり。三世十方の仏は、必ず妙法蓮華経の五字を種として仏に成り給えり。

（170秋元御書1458ページ－9行）

三千世界に満つる珍宝なれども、命に替わることはなし。

（170秋元御書1463ページ－9行）

第六天の魔王、あるいは妻子の身に入って親や夫をたぼらかし、あるいは国王の身に入って法華経の行者をおどし、

あるいは父母の身に入って孝養の子をせむることあり。

（171兄弟抄1472ページ－9行）

今生に正法を行ずる功徳強盛なれば、未来の大苦を招越まねきこして少苦に値うなり。

（171兄弟抄1473ページ－8行）

この法門を申すには、必ず魔出来すべし。魔競わずば、正法と知るべからず。

（171 兄弟抄1479ページ-12行）

女人（にょにん）となることは、物（もの）に随（したが）って物（もの）を随（したが）える身（み）なり。

（171 兄弟抄1480ページ-11行）

たといいかなるわずらわしきことありとも、夢（ゆめ）になして、ただ法華経（ほけきょう）のことのみさばくらせ給（たも）うべし。

（171 兄弟抄1481ページ-3行）

これより後(のち)も、いかなることありとも、すこしもたゆ(弛)むことなかれ。いよいよはりあげてせ(張上責)むべし。たとい命(いのち)に及(およ)ぶとも、すこしもひるむ(怯)ことなかれ。

（174 兵衛志殿御返事(ひょうえのさかんどのごへんじ)（鎌足造仏(かまたりぞうぶつ)の事(こと)）1484ページ－11行）

しおのひるとみつと、月(潮干満)の出(つきい)ずるといると、夏(入)と秋(なつあき)と、冬(ふゆ)と春(はる)とのさかい(堺)には、必(かなら)ず相違(そうい)することあり。凡夫(ぼんぷ)の仏(ほとけ)になる、またかくのごとし。必(かなら)ず三障四魔(さんしょうしま)と申(もう)す障り(出)いできたれば、賢者(けんじゃ)はよろこび愚者(ぐしゃ)は退(しりぞ)く、これなり。

（176 兵衛志殿御返事（三障四魔の事）1488ページー4行）

法華経を一字一句も唱え、また人にも語り申さんものは、教主釈尊の御使いなり。しかれば、日蓮、賤しき身なれども、教主釈尊の勅宣を頂戴してこの国に来れり。これを一言もそしらん人々は罪を無間に開き、一字一句も供養せん人は無数の仏を供養するにもすぎたりと見えたり。

（195 四条金吾殿御返事（梵音声の事）1527ページー2行）

いかなる世の乱れにも各々をば法華経・十羅刹助け給えと、湿れる木より火を出だし、乾ける土より水を儲けんがごとく、強盛に申すなり。

（196 呵責謗法滅罪抄 1539ページ－4行）

この経を持つ女人は一切の女人にすぎたるのみならず、一切の男子にこえたりとみえて候。

（198 四条金吾殿女房御返事 1542ページ－13行）

一切(いっさい)の人(ひと)はにくまばにくめ、釈迦仏(しゃかぶつ)・多宝仏(たほうぶつ)・十方(じっぽう)の諸仏(しょぶつ)、乃至梵王(ないしぼんのう)・帝釈(たいしゃく)・日月等(にちがつとう)にだにもふびん(不便)とおもわれまいらせなば、なにくるし(苦)。法華経(ほけきょう)にだにもほめ(褒)られたてまつりなば、なにかくるしかるべき。

（198 四条金吾殿女房御返事(しじょうきんごどののにょうぼうごへんじ) 1542ページ－16行）

大将軍(たいしょうぐん)心(こころ)弱(よわ)ゆわければ、したがうものもかいなし。ゆみゆわ(弦緩)(甲斐)(弓弱)ければつるゆるし、風(かぜ)ゆる(緩)なればなみ(波)ちいさき(小)は、じねん(自然)のどうり(道理)なり。

（198 四条金吾殿女房御返事 1543ページー8行）

三十三のやくは、転じて三十三のさいわいとならせ給うべし。「七難は即ち滅し、七福は即ち生ず」とは、これなり。年はわこうなり、福はかさなり候べし。

（198 四条金吾殿女房御返事 1543ページー14行）

火にたきぎを加うる時はさかんなり。大風吹けば求羅は倍増するなり。松は万年のよわいを持つ故に枝をまげらる。

法華経の行者は火と求羅とのごとし。薪と風とは大難のごとし。法華経の行者は久遠長寿の如来なり。修行の枝をきられ、まげられんこと、疑いなかるべし。

（199四条金吾殿御返事（此経難持の事）1545ページ－1行）

受くるはやすく、持つはかたし。さるあいだ、成仏は持つにあり。この経を持たん人は難に値うべしと心得て持つなり。

（199四条金吾殿御返事（此経難持の事）1544ページ－13行）

御(おん)いのりの叶(かな)い候(そうら)わざらんは、弓(ゆみ)のつよくしてつるよわく(弦弱)、太刀(たち)・つるぎ(剣)にてつかう人(ひと)の臆病(おくびょう)なるようにて候(そうろう)べし。あえて法華経(ほけきょう)の御(おん)とがにては失(そうろう)べからず。

（200王舎城事(おうしゃじょうじ)1547ページ－3行）

鎌倉殿(かまくらどの)の御勘気(ごかんき)を二度(にど)までかぶり(被)、すでに頸(くび)となりしかども、ついにおそれ(恐)ずして候(そうら)えば、今(いま)は日本国(にほんこく)の人々(ひとびと)も道理(どうり)かと申(もう)すへん(辺)もあるやらん。

（200 王舎城事 1547ページー12行）

一切衆生、南無妙法蓮華経と唱うるより外の遊楽なきなり。経に云わく「衆生所遊楽（衆生の遊楽する所）」云々。

（203 四条金吾殿御返事（衆生所遊楽御書）1554ページー6行）

「遊楽」とは、我らが色心・依正ともに一念三千・自受用身の仏にあらずや。法華経を持ち奉るより外に遊楽はなし。「現世安穏、後生善処」とは、これなり。

（203 四条金吾殿御返事（衆 生所遊楽御書）1554ページー8行）

苦をば苦とさとり、楽をば楽とひらき、苦楽ともに思い合わせて南無妙法蓮華経とうちとなえいさせ給え。これあに自受法楽にあらずや。

（203 四条金吾殿御返事（衆 生所遊楽御書）1554ページー12行）

日蓮をたすけんと志す人々少々ありといえども、あるいは心ざしうすし、あるいは心ざしはあつけれども、身

合期

ごうごせず。ようようにおわするに、御辺様々はその一分なり。心ざし人にすぐれておわする上、わずかの身命をささうるもまた御故なり。

（205 四条金吾殿御返事（智人弘法の事）1562ページー14行）

賢人は、八風と申して八つのかぜにおかされぬを、賢人と申すなり。利い・衰え・毀れ・誉れ・称え・譏り・苦しみ・楽しみなり。

（206 四条金吾殿御返事（八風抄）1565ページー3行）

だんなと師とおもいあわぬいのりは、水の上に火をたくがごとし。

（206 四条金吾殿御返事（八風抄）1566ページ－1行）

涅槃経に仏最後の御遺言として、『法に依って人に依らざれ』と見えて候。

（207 頼基陳状 1571ページ－5行）

一生はゆめの上、明日をごせず。いかなる乞食にはなるとも、法華経にきずをつけ給うべからず。

（208 四条金吾殿御返事（不可惜所領の事）1583ページ－10行）

夫れ、仏法と申すは勝負をさきとし、王法と申すは賞罰を本とせり。

（209 四条金吾殿御返事（世雄御書）1585ページ－7行）

きたわぬかねは、さかんなる火に入るればとくとけ候。

氷(こおり)をゆ(湯)に入(い)るるがごとし。剣(つるぎ)なんどは、大火(たいか)に入(い)るれども、しばらくはとけ(溶)ず。これきたえる故(ゆえ)なり。（209 四条金吾殿御返事(しじょうきんごどのごへんじ)（世雄御書(せおうごしょ)）1590ページ-8行）

仏法(ぶっぽう)と申(もう)すは道理(どうり)なり。道理(どうり)と申(もう)すは主(しゅ)に勝(か)つものなり。（209 四条金吾殿御返事(しじょうきんごどのごへんじ)（世雄御書(せおうごしょ)）1590ページ-10行）

さきざき申(もう)すが前々(ごとく)、さきざきよりも百千万億倍(ひゃくせんまんおくばい)御用心(ごようじん)あるべし。

（209 四条金吾殿御返事（世雄御書）1590ページ－12行）

日蓮は少きより今生のいのりなし。ただ仏にならんと思おもうばかりなり。

（209 四条金吾殿御返事（世雄御書）1590ページ－14行）

人身は受けがたし、爪の上の土。人身は持ちがたし、草の上の露。百二十まで持って名をくたして死せんよりは、生きて一日なりとも名をあげんことこそ大切なれ。

（210 崇峻天皇御書（三種財宝御書）1596ページ－6行）

「中務三郎左衛門尉は、主の御ためにも、仏法の御ためにも、世間の心ねも、よかりけり、よかりけり」と、鎌倉の人々の口にうたわれ給え。

（210 崇峻天皇御書（三種財宝御書）1596ページ－7行）

蔵の財よりも身の財すぐれたり、身の財より心の財第一なり。この御文を御覧あらんよりは、心の財をつませ

給うべし。

（210 崇峻天皇御書（三種財宝御書）1596ページ－9行）

一代の肝心は法華経、法華経の修行の肝心は不軽品にて候なり。不軽菩薩の人を敬いしは、いかなることぞ。教主釈尊の出世の本懐は人の振る舞いにて候いけるぞ。あなかしこ、あなかしこ。賢きを人と云い、はかなきを畜という。

（210 崇峻天皇御書（三種財宝御書）1597ページ－13行）

定業の者は薬変じて毒となる、法華経は毒変じて薬となると見えて候。

（215四条金吾殿御返事（石虎将軍御書）1607ページ－15行）

法華経はよきつるぎなれども、つかう人によりて物をきり候か。

（215四条金吾殿御返事（石虎将軍御書）1608ページ－11行）

敵はねらうらめども、法華経の御信心強盛なれば、大難もかねて消え候か。これにつけても能く能く御信心あるべし。

（215四条金吾殿御返事（石虎将軍御書）1609ページ－1行）

頭をふればかみゆるぐ。心はたらけば身うごく。大風吹けば草木しずかならず。大地うごけば大海さわがし。教主釈尊をうごかし奉れば、ゆるがぬ草木やあるべき、さわがぬ水やあるべき。

（216 日眼女造立釈迦仏供養事（にちげんにょぞうりゅうしゃかぶつくようじ） 1610ページ－4行）

陰徳あれば陽報（いんとく　ようほう）あり

（217 陰徳陽報御書（いんとくようほうごしょ） 1613ページ－2行）

「根（ね）ふかければ枝（えだ）さかえ、源（みなもとの）遠（とお）ければ流（なが）れ長（なが）し」と申（もう）して、一切（いっさい）の経（きょう）は根（ね）あさく流（なが）れ近（ちか）く、法華経（ほけきょう）は根（ね）ふかく源（みなもと）とおし

（218 四条金吾殿御返事（源遠流長の事）（しじょうきんごどのごへんじ　げんおんりゅうちょうのこと） 1615ページ－7行）

この法門(ほうもん)につきし人(ひと)あまた候(そうら)いしかども、おおやけ(公)・わたくし(私)の大難(だいなん)度々(たびたびかさ)重(かさ)なり候(そうら)いしかば、一年(いちねん)二年(にねん)こそつき候(そうら)いしが、後々(のちのち)には、皆(みな)、あるいはおち(落)、あるいはかえり(返)矢(や)を射(い)る。あるいは身(み)はおちねども心(こころ)おち、あるいは心(こころ)はおちねども身(み)はおちぬ。

（218 四条金吾殿御返事(しじょうきんごどのごへんじ)（源遠流長(げんおんりゅうちょう)の事(こと)）1615ページ－8行）

始中終(しちゅうじゅう)捨(すてず)して大難(だいなん)をとおす(通)人(ひと)、如来(にょらい)の使(つか)いなり。

（218 四条金吾殿御返事（源遠流長の事）1616ページー17行）

仏の大難には及ぶか勝れたるか、それは知らず。

竜樹・天親・天台・伝教は余に肩を並べがたし。日蓮末法に出でずば、仏は大妄語の人、多宝・十方の諸仏は大虚妄の証明なり。仏の滅後二千二百三十余年が間、一閻浮提の内に仏の御言を助けたる人、ただ日蓮一人なり。

（219 聖人御難事 1619ページー5行）

過去・現在の末法の法華経の行者を軽賤する王臣・万民、始めは事なきようにて、終にほろびざるは候わず。

日蓮またかくのごとし。

（219 聖人御難事 1619ページ－10行）

各々、師子王の心を取り出だして、いかに人おどすともおずることなかれ。師子王は百獣におじず。師子の子、またかくのごとし。彼らは野干のほうるなり。日蓮が一門は師子の吼うるなり。

（219聖人御難事1620ページ－1行）

月々日々につより給え。すこしもたゆむ心あらば、魔たより得をうべし。

（219聖人御難事1620ページ－7行）

我ら、現にはこの大難に値うとも、後生は仏になりなん。たとえば灸治のごとし。当時はいたけれども、後の薬なれば、いたくていたからず。

（219 聖人御難事1620ページ－12行）

彼のあつわらの愚癡の者ども、いいはげましておとすこと
なかれ。彼らには、ただ一えんにおもい切れ。よからんは
不思議、わるからんは一定とおもえ。

（219 聖人御難事1620ページ－14行）

よからんは不思議、わるからんは一定とおもえ。

（219 聖人御難事1620ページ－15行）

前々の用心といい、またけなげといい、また法華経の信心つよき故に、難なく存命せさせ給い、めでたし、めでたし。

夫れ、運きわまりぬれば兵法もいらず、果報つきぬれば所従もしたがわず。

（220 四条金吾殿御返事（法華経兵法の事）1622ページ－7行）

いかに日蓮いのり申すとも、不信ならば、ぬれたるほくちに火をうちかくるがごとくなるべし。はげみをなして強盛に

信力(しんりき)をいだし給(たも)うべし。

（220四条金吾殿御返事(しじょうきんごどのごへんじ)（法華経兵法の事(ほけきょうへいほうのこと)）1623ページ－7行）

なにの兵法(へいほう)よりも法華経(ほけきょう)の兵法(へいほう)をもちい給(たも)うべし。

（220四条金吾殿御返事(しじょうきんごどのごへんじ)（法華経兵法の事(ほけきょうへいほうのこと)）1623ページ－9行）

ふかく信心(しんじん)をとり給(たま)え。あえて臆病(おくびょう)にては叶(かな)うべからず候(そうろう)。

（220四条金吾殿御返事(しじょうきんごどのごへんじ)（法華経兵法の事(ほけきょうへいほうのこと)）1623ページ－10行）

いかに申さじと思うとも、毀らん人にはいよいよ申し聞かすべし。命生きて御坐しまさば、御覧あるべし。またいかに唱うとも、日蓮に怨をなせし人々は、まず必ず無間地獄に堕ちて、無量劫の後に日蓮の弟子と成って成仏すべし。

（224 経王御前御書 1632ページー1行）

師子王は、前三後一と申して、ありの子を取らんとするにも、またたけきものを取らんとする時も、いきおいを出だすこ

とは、ただおなじきことなり。日蓮、守護たるところの御本尊をしたため参らせ候ことも、師子王におとるべからず。

（225経王殿御返事1632ページー15行）

南無妙法蓮華経は師子吼のごとし、いかなる病さわりをなすべきや。

（225経王殿御返事1633ページー1行）

つるぎなんども、すすまざる人のためには用いることなし。法華経の剣は、信心のけなげなる人こそ用いることなれ。鬼にかなぼうたるべし。日蓮がたましいをすみにそめながしてかきて候ぞ、信じさせ給え。

（225 経王殿御返事 1633ページー5行）

日蓮がたましいをすみにそめながしてかきて候ぞ、信じさせ給え。仏の御意は法華経なり、日蓮がたましいは南無妙法蓮華経にすぎたるはなし。

（225 経王殿御返事 1633ページー7行）

わざわい(禍)も転(てん)じて幸(さいわ)いとなるべし。あいかまえて(相構)御信心(ごしんじん)を出(い)だし、この御本尊(ごほんぞん)に祈念(きねん)せしめ給(たま)え。何事(なにごと)か成就(じょうじゅ)せざるべき。

（225 経王殿御返事 1633ページー9行）

日蓮(にちれん)その身(み)にあいあたり(相当)て、大兵(たいへい)をおこし(起)て二十余年(にじゅうよねん)なり。日蓮(にちれん)、一度(いちど)もしりぞく(退)心(こころ)なし。

（227 弁殿 並 尼御前御書 1635ページー7行）

日月は東より出でさせ給わぬことはありとも、大地は反覆することはありとも、大海の潮はみちひぬことはありとも、破れたる石は合うとも、江河の水は大海に入らずとも、法華経を信じたる女人の世間の罪に引かれて悪道に堕つることはあるべからず。

（234 月水御書 1645ページー1行）

「この法華経の本門の肝心・妙法蓮華経は、三世の諸仏の万行万善の功徳を集めて五字となせり。この五字の内にあに万戒の功徳を納めざらんや。ただし、この具足の妙戒は、一度持って後、行者破らんとすれども破れず。これを金剛宝器戒とや申しけん」

（239教行証御書1676ページ－9行）

日蓮が弟子等は臆病にては叶うべからず。

（239教行証御書1675ページ－17行）

道(みち)のとおきに心(こころ)ざしのあらわるるにや。顕

（241　乙御前母御書(おとごぜんのははごしょ)　1684ページ-17行）

犬(いぬ)は師子(しし)をほうれば腸(はらわた)くさる。腐　修羅(しゅら)は日輪(にちりん)を射奉(いたてまつ)れば頭七分(こうべしちぶん)に破(わ)る。一切(いっさい)の真言師(しんごんし)は犬(いぬ)と修羅(しゅら)とのごとく、法華経(ほけきょう)の行者(ぎょうじゃ)は日輪(にちりん)と師子(しし)とのごとし。吠

（242　乙御前御消息(おとごぜんごしょうそく)　1687ページ-17行）

軍(いくさ)には大将軍(だいしょうぐん)を魂(たましい)とす。大将軍(たいしょうぐん)おくしぬれば、歩兵(つわもの)臆病(おくびょう)なり。

（242乙御前御消息(おとごぜんごしょうそく)1688ページ－14行）

法華経(ほけきょう)は、女人(にょにん)の御(おん)ためには、暗(くら)きにともし灯(び)、海(うみ)に船(ふね)、恐(おそ)ろしき所(ところ)にはまぼりとなるべきよし、ちかわせ給(たま)えり。

（242乙御前御消息(おとごぜんごしょうそく)1689ページ－6行）

されば、妙楽大師(みょうらくだいし)のたまわく宣(「)必(かなら)ず心(こころ)の固(かた)きに仮(よ)って、

神の守り則ち強し」等云々。

（242乙御前御消息1689ページ－13行）

日蓮をば、日本国の上一人より下万民に至るまで一人もなくあやまたんとせしかども、今までこうて候ことは、一人なれども心のつよき故なるべしとおぼすべし。

（242乙御前御消息1689ページ－17行）

一つ船に乗りぬれば、船頭のはかり事わるければ一同に

船中の諸人損じ、また身つよき人も、心かいなければ多くの能も無用なり。

（242 乙御前御消息 1690ページ－2行）

いよいよ強盛の御志あるべし。氷は水より出でたれども、水よりもすさまじ。青きことは藍より出でたれども、重かさぬれば藍よりも色まさる。同じ法華経にてはおわすれども、志をかさぬれば、他人よりも色まさり、利生もあるべきなり。

（242 乙御前御消息 1690ページー13行）

「身は軽く法は重し。身を死して法を弘む」とのべて候えば、身は軽ければ人は打ちはり悪むとも、法は重ければ必ず弘まるべし。

（242 乙御前御消息 1691ページー7行）

そもそも、一人の盲目をあけて候わん功徳すら申すばかりなし。いわんや、日本国の一切衆生の眼をあけて候わん

功徳をや。

（242乙御前御消息1691ページ－12行）

法華経を信ずる人は冬のごとし。冬は必ず春となる。

（244妙一尼御前御消息（冬は必ず春となるの事）1696ページ－1行）

夫れ、信心と申すは別にはこれなく候。妻のおとこをおしむがごとく、おとこの妻に命をすつるがごとく、親の子を

捨すてざるがごとく、子の母にはなれざるがごとくに、法華経、釈迦・多宝、十方の諸の仏菩薩、諸天善神等に信を入れ奉って、南無妙法蓮華経と唱えたてまつるを、信心とは申し候なり。

（245 妙一尼御前御返事 1697ページ－6行）

人に食を施すに、三つの功徳あり。一には命をつぎ、二には色をまし、三には力を授く。

（251 妙密上人御消息 1706ページ－11行）

「已今当」の経文を深くまぼり、一経の肝心たる題目を、我も唱え、人にも勧む。麻の中の蓬、墨うてる木の、自体は正直ならざれども、自然に直ぐなるがごとし。経のままに唱うれば、まがれる心なし。

（251 妙密上人御消息 1710ページー2行）

賢人と申すは、よき師より伝えたる人、聖人と申すは、師無くして我と覚れる人なり。

（251 妙密上人御消息 1710ページ－8行）

上一人より下万民に至るまで、法華経の神力品のごとく、一同に南無妙法蓮華経と唱え給うこともやあらんずらん。

木はしずかならんと思えども風やまず、春を留めんと思えども夏となる。

（251 妙密上人御消息 1711ページ－16行）

金はやけばいよいよ色まさり、剣はとげばいよいよ利く

なる。法華経の功徳は、ほむればいよいよ功徳まさる。

（251 妙密上人御消息 1713ページー1行）

仏は真に尊くして物によらず。昔の徳勝童子は、沙の餅を仏に供養し奉って阿育大王と生まれて、一閻浮提の主たりき。貧女の我がかしらをおろして油と成せしが、須弥山を吹きぬきし風もこの火をけさず。

（254 王日殿御返事 1716ページー7行）

法華経の一字は大地のごとし、万物を出生す。一字は大海のごとし、衆流を納む。一字は日月のごとし、四天下をてらす。この一字変じて月となる。月変じて仏となる。

（254 王日殿御返事 1716ページー11行）

御みやづかいを法華経とおぼしめせ。「一切世間の治生産業は、皆実相と相違背せず」とは、これなり。

（256 檀越某御返事 1719ページー1行）

大難来りなば、強盛の信心いよいよ悦びをなすべし。

（258 椎地四郎殿御書 1720ページー9行）

法華経の法門を一文一句なりとも人にかたらんは、過去の宿縁ふかしとおぼしめすべし。

（258 椎地四郎殿御書 1720ページー14行）

僧も俗も、尼も女も、一句をも人にかたらん人は如来の使いと見えたり。

（258 椎地四郎殿御書 1720ページー17行）

この良薬を持たん女人等をば、この四人の大菩薩、前後左右に立ちそいて、この女人たたせ給えば、この大菩薩も立たせ給う。乃至、この女人道を行く時は、この菩薩も道を行き給う。

（261 妙法曼陀羅供養事 1728ページー3行）

夫れ、法華経の意は、「一切衆生皆成仏道」の御経なり。

しかりといえども、信ずる者は成仏をとぐ、謗ずる者は無間大城に堕つ。

（262阿仏房尼御前御返事1729ページ－7行）

いよいよ信心をはげみ給うべし。仏法の道理を人に語らん者をば、男女僧尼必ずにくむべし。よしにくまばにくめ、法華経・釈迦仏・天台・妙楽・伝教・章安等の金言に身をまかすべし。「如説修行」の人とは、これなり。

（262阿仏房尼御前御返事1730ページ－14行）

相構えて相構えて、力あらんほどは謗法をばせめさせ給うべし。日蓮が義を助け給うこと、不思議に覚え候ぞ、不思議に覚え候ぞ。

（262阿仏房尼御前御返事1731ページ－12行）

末法に入って法華経を持つ男女のすがたより外には宝塔なきなり。もししからば、貴賤上下をえらばず、南無妙法蓮華経ととなうるものは、我が身宝塔にして我が

身(み)また多宝如来(たほうにょらい)なり。

（263 阿仏房御書(あぶつぼうごしょ)（宝塔御書(ほうとうごしょ)）1732ページー15行）

阿仏上人(あぶつしょうにん)の一身(いっしん)は地(ち)・水(すい)・火(か)・風(ふう)・空(くう)の五大(ごだい)なり。この五大(ごだい)は題目(だいもく)の五字(ごじ)なり。

しかれば、阿仏房(あぶつぼう)さながら宝塔(ほうとう)、宝塔(ほうとう)さながら阿仏房(あぶつぼう)、これより外(ほか)の才覚無益(さいかくむやく)なり。

（263 阿仏房御書(あぶつぼうごしょ)（宝塔御書(ほうとうごしょ)）1733ページー1行）

この経文は一切経に勝れたり。地走る者の王たり、師子王のごとし。空飛ぶ者の王たり、鷲のごとし。

（265千日尼御前御返事（真実報恩経の事）1737ページ－11行）

ここに日蓮、願じて云わく「日蓮は全く誤りなし。たとい僻事なりとも、日本国の一切の女人を扶けんと願ぜる志はすてがたかるべし。

（265千日尼御前御返事（真実報恩経の事）1740ページ－13行）

久遠実成の釈尊と皆成仏道の法華経と我ら衆生との三つ全く差別無しと解って妙法蓮華経と唱え奉るところを、生死一大事の血脈とはいうなり。

（276 生死一大事血脈抄 1774ページー17行）

過去に法華経の結縁強盛なる故に、現在にこの経を受持す。未来に仏果を成就せんこと疑いあるべからず。過去の生死、現在の生死、未来の生死、三世の生死に法華経を離れ切れざるを、法華の血脈相承とは云うなり。

（276 生死一大事血脈抄 1775ページ－10行）

総じて、日蓮が弟子檀那等、自他・彼此の心なく、水魚の思いを成して、異体同心にして南無妙法蓮華経と唱え奉るところを、生死一大事の血脈とは云うなり。しかも、今、日蓮が弘通するところの所詮これなり。もししからば、広宣流布の大願も叶うべきものか。

（276 生死一大事血脈抄 1775ページ－14行）

金は大火にも焼けず、大水にも漂わず、朽ちず。鉄は水火共に堪えず。賢人は金のごとく、愚人は鉄のごとし。貴辺あに真金にあらずや。法華経の金を持つ故か。

（276 生死一大事血脈抄 1776ページー3行）

過去の宿縁追い来って、今度日蓮が弟子と成り給うか。釈迦・多宝こそ御存知候らめ。「在々諸仏土、常与師俱生（いたるところの諸仏の土に、常に師とともに生ず）」、よも虚事候わじ。

（276生死一大事血脈抄1776ページー8行）

相構えて相構えて、強盛の大信力を致して、南無妙法蓮華経臨終正念と祈念し給え。生死一大事の血脈、これより外に全く求むることなかれ。

（276生死一大事血脈抄1777ページー1行）

信心の血脈なくんば、法華経を持つとも無益なり。

（276生死一大事血脈抄1777ページー2行）

日蓮、智者にあらずといえども、第六天の魔王、我が身に入らんとするに、兼ねての用心深ければ身によせつけず。

（278 最蓮房御返事 1780ページ－10行）

法華経の行者は、信心に退転無く、身に詐親無く、一切法華経にその身を任せて金言のごとく修行せば、たしかに後生は申すに及ばず、今生も息災延命にして勝妙の大果報を得、広宣流布の大願をも成就すべきなり。

（279 祈禱経送状 1786ページ－15行）

下地獄より上仏界までの十界の依正の当体、ことごとく一法ものこさず妙法蓮華経のすがたなり

（280 諸法実相抄 1788ページ－9行）

実相というは、妙法蓮華経の異名なり。諸法は妙法蓮華経ということなり。地獄は地獄のすがたを見せたるが実の相なり。餓鬼と変ぜば、地獄の実のすがたにはあらず。仏は

仏のすがた、凡夫は凡夫のすがた、万法の当体のすがたが妙法蓮華経の当体なりということを、諸法実相とは申すなり。

（280 諸法実相抄 1789ページ－14行）

地涌の菩薩のさきがけ日蓮一人なり。地涌の菩薩の数にもや入りなまし。もし日蓮、地涌の菩薩の数に入らば、あに、日蓮が弟子檀那、地涌の流類にあらずや。

（280 諸法実相抄 1790ページ－10行）

堪え
たえて弘めん者をば、衣をもって釈迦仏おおい給うべきぞ、
諸天は供養をいたすべきぞ、肩懸背中負かたにかけせなかにおうべきぞ、大善根の者にてあるぞ

（280 諸法実相抄 1790ページー16行）

ともかくも法華経に名をたて身をまかせ給うべし。釈迦仏・多宝仏・十方の諸の仏菩薩、虚空にして二仏うなずき合い、定めさせ給いしは別のことにはあらず。ただひとえに末法

の令法久住の故なり。

（280 諸法実相抄 1791ページー3行）

いかにも、今度、信心をいたして、法華経の行者にてとおり、日蓮が一門となりとおし給うべし。日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか。地涌の菩薩にさだまりなば、釈尊久遠の弟子たること、あに疑わんや。

（280 諸法実相抄 1791ページー6行）

末法にして妙法蓮華経の五字を弘めん者は、男女はきらうべからず、皆地涌の菩薩の出現にあらずんば唱えがたき題目なり。

（280 諸法実相抄 1791ページー8行）

日蓮一人はじめは南無妙法蓮華経と唱えしが、二人・三人・百人と次第に唱えつたうるなり。未来もまたしかるべし。これ、あに地涌の義にあらずや。あまつさえ、広宣流布の時は、日本一同に南無妙法蓮華経と唱えんことは、大地を的と

するなるべし。

（280 諸法実相抄 1791ページ－10行）

凡夫なれば過去をしらず。現在は見えて法華経の行者なり。また未来は決定として当詣道場なるべし。過去をもこれをもって推するに、虚空会にもやありつらん。三世各別あるべからず。

かくのごとく思いつづけて候えば、流人なれども喜悦はかりなし。うれしきにもなみだ、つらきにもなみだなり。

ぼんぷ　かこ　知　げんざい　み　ほけきょう　ぎょうじゃ　みらい　けつじょう　とうけいどうじょう　かこ　すい　こくうえ　さんぜかくべつ　おも　続　そうら　るにん　きえつ　計　無　嬉　涙　辛

（280 諸法実相抄 1792ページー2行）

法華経の行者となることは過去の宿習なり。同じ草木なれども仏とつくらるるは宿縁なるべし。仏なりとも権仏となるは、また宿業なるべし。

（280 諸法実相抄 1792ページー5行）

現在の大難を思いつづくるにもなみだ、未来の成仏を思って喜ぶにもなみだせきあえず。鳥と虫とはなけどもなみだ

落
おちず。日蓮はなかねどもなみだひまなし。このなみだ世間
のことにはあらず。ただひとえに法華経の故なり。
（280 諸法実相抄 1792ページー11行）

行学の二道をはげみ候べし。行学たえなば仏法はある
べからず。我もいたし、人をも教化候え。行学は信心より
おこるべく候。力あらば一文一句なりともかたらせ給う
べし。
（280 諸法実相抄 1793ページー3行）

眠(ねむ)れる師子(ししし)に手(て)を付(つ)けざれば瞋(いか)らず、流(なが)れにさおを立(た)てざれば浪立(なみた)たず、謗法(ほうぼう)を呵責(かしゃく)せざれば留難(るなん)なし。

「もし善比丘(ぜんびく)あって、法(ほう)を壊(やぶ)る者(もの)を見(み)て、置(お)いて、呵責(かしゃく)せずんば」の「置(お)」の字(じ)をおそれずんば、今(いま)は吉(よ)し、後(のち)を御(ご)らんぜよ、無間地獄(むけんじごくう)疑(たが)いなし。

（283 南部六郎殿御書(なんぶのろくろうどのごしょ) 1807ページ-11行）

過去(かこ)に十万億(じゅうまんおく)の仏(ほとけ)を供養(くよう)せるの人(ひと)、人間(にんげん)に生(う)まれて、この

法華を信ぜん

（284 波木井三郎殿御返事 1813ページー6行）

いかなる大善をつくり、法華経を千万部読み書写し、一念三千の観道を得たる人なりとも、法華経のかたきをだにもせめざれば得道ありがたし。

（296 南条兵衛七郎殿御書 1826ページー12行）

いきておわしき時は生の仏、今は死の仏、生死ともに仏

なり。即身成仏と申す大事の法門これなり。

（297上野殿後家尼御返事1832ページ－15行）

夫れ、浄土というも、地獄というも、外には候わず。ただ我らがむねの間にあり。これをさとるを仏という。これにまようを凡夫と云う。

（297上野殿後家尼御返事1832ページ－17行）

法華経の法門をきくにつけてなおなお信心をはげむを、

まことの道心者とは申すなり。（297上野殿後家尼御返事1834ページー1行）

天台云わく「従藍而青（藍よりして、しかも青し）」云々。この釈の心は、あいは葉のときよりも、なおそむればいよいよあおし。法華経はあいのごとし、修行のふかきはいよいよあおきがごとし。（297上野殿後家尼御返事1834ページー2行）

「かくれての信あれば、あらわれての徳あるなり」

（305上野殿御消息（四徳四恩の事）1850ページー13行）

なかなかしき人の、信ずるようにてなめりて候えば、人の信心をもやぶり候なり。

（311上野殿御返事（梵帝御計らいの事）1867ページー10行）

そもそも、今の時、法華経を信ずる人あり。あるいは火のごとく信ずる人もあり、あるいは水のごとく信ずる人もあり。

聴聞する時はもえたつばかりおもえどもとおざかりぬれ
ばすつる心あり。水のごとくと申すは、いつもたいせず信
ずるなり。

（314 上野殿御返事（水火二信抄）1871ページー16行）

今、末法に入りぬれば、余経も法華経もせんなし、ただ
南無妙法蓮華経なるべし。こう申し出だして候も
わたくしの計らいにはあらず、釈迦・多宝・十方諸仏・地涌
千界の御計らいなり。この南無妙法蓮華経に余事をまじえ

ば、ゆゆしきひが事なり。

（315 上野殿御返事（末法要法の事）1874ページ－13行）

悪積もれば地獄となる、善積もれば仏となる。女人は嫉妬かさなれば毒蛇となる。法華経供養の功徳かさならば、あに竜女があとをつがざらん。

（317 南条殿女房御返事 1876ページ－7行）

そもそも、日蓮、種々の大難の中には竜の口の頸の座と

東条の難にはすぎず。その故は、諸難の中には命をすつる程の大難はなきなり。あるいはのり、せめ、あるいは処をおわれ、無実を云いつけられ、あるいは面をうたれしなどは物のかずならず。されば、色心の二法よりおこりてそしられたる者は、日本国の中には日蓮一人なり。

（324上野殿御返事（刀杖難の事）1888ページー6行）

とにかくに、法華経に身をまかせ信ぜさせ給え。殿一人にかぎるべからず、信心をすすめ給いて、過去の父母等をすく

わせ給(たま)え。

（324 上野殿御返事（刀杖難(とうじょうなん)の事(こと)） 1891ページー16行）

日蓮(にちれん)、生(う)まれし時(とき)よりいまに一日片時(いちにちかたとき)もこころ心やすきことはなし。この法華経(ほけきょう)の題目(だいもく)を弘(ひろ)めんと思(おも)うばかりなり。

（324 上野殿御返事(うえのどのごへんじ)（刀杖難(とうじょうなん)の事(こと)） 1892ページー1行）

飢願(じき)かつえて食をねがい、渇(かっ)して水(みず)をしたうがごとく、慕(こ)いて人(ひと)を見(み)たきがごとく、病(やまい)にくすり薬をたのむ頼がごとく、

見目形　ひと　紅　白　物　付

みめかたちよき人、べに・しろいものをつくるがごとく、法華経には信心をいたさせ給え。さなくしては後悔あるべし

（324上野殿御返事（刀杖難の事）1892ページ－6行）

願わくは、我が弟子等、大願をおこせ。

（326上野殿御返事（竜門御書）1895ページ－10行）

とにかくに死は一定なり。その時のなげきはとうじのごと

し　いちじょう　とき　歎　当時

同仮法華経のゆえに命捨てよ。つゆし。おなじくは、かりにも法華経のゆえに命をすてよ。つゆ露

塵埋思を大海にあつらえ、ちりを大地にうずむとおもえ。

（326上野殿御返事（竜門御書）1895ページ－10行）

花は開いて果となり、月は出でて必ずみち、灯は油をさ差せば光を増し、草木は雨ふればさかう。人は善根をなせば必ずさかう。

（328上野殿御返事（正月三日の事）1897ページ－13行）

女子は門をひらく

（331 上野殿御返事（日若御前誕生の事）1902ページー6行）

しかるに、釈迦仏は「我を無量の珍宝をもって億劫の間供養せんよりは、末代の法華経の行者を一日なりとも供養せん功徳は百千万億倍過ぐべし」とこそ説かせ給いて候

（340 南条殿御返事（法妙人貴の事）1923ページー15行）

法妙なるが故に人貴し。人貴きが故に所尊し

（340 南条殿御返事（法妙人貴の事）1924ページ－6行）

人の地に倒れて、還って地より起くるがごとし

（345 法華証明抄 1931ページ－1行）

すでに仏になるべしと見え候えば、天魔・外道が病をつけておどさんと心み候か。命はかぎりあることなり。すこしもおどろくことなかれ。

（345 法華証明抄 1931ページ－9行）

日蓮、仏法をこころみるに、道理と証文とにはすぎず。また道理・証文よりも現証にはすぎず。

（352 三三蔵祈雨事 1941ページー8行）

夫れ、木をうえ候には、大風ふき候えども、つよきすけをかいぬればたおれず。本より生いて候木なれども、根の弱きはたおれぬ。甲斐なき者なれども、たすくる者強ければたおれず。すこし健げの者も、独りなれば悪しきみちには

たおれぬ。（倒）

（352三三蔵祈雨事（さんさんぞうきうのこと）1940ページー6行）

智者（ちしゃ）とは、世間（せけん）の法（ほう）より外（ほか）に仏法（ぶっぽう）を行（おこな）わず。世間（せけん）の治世（ちせい）の法（ほう）を能（よ）く能（よ）く心（こころ）得（え）て候（そうろう）を、智者（ちしゃ）とは申（もう）すなり。

（363減劫御書（げんこうごしょ）1968ページー12行）

法華経（ほけきょう）の御心（みこころ）と申（もう）すは、これていのことにて候（そうろう）。外（ほか）のことと思（おぼ）すべからず。

大悪は大善の来るべき瑞相なり。

（363 減劫御書 1969ページ－4行）

大悪は大善の来るべき瑞相なり。一閻浮提うちみだすならば、「閻浮提内、広令流布（閻浮提の内に、広く流布せしむ）」は、よも疑い候わじ。

（363 減劫御書 1969ページ－4行）

聖人の唱えさせ給う題目の功徳と、我らが唱え申す題目の

功徳と、いか程の多少候べきや」と云々。さらに勝劣あるべからず候。

その故は、愚者の持ちたる金も智者の持ちたる金も、愚者の然せる火も智者の然せる火も、その差別なきなり。

（374 松野殿御返事（十四誹謗の事）1987ページー8行）

無智の者は、この経を説く者に使われて功徳をうべし。いかなる鬼畜なりとも法華経の一偈一句をも説かん者をば「当に起って遠く迎うべきこと、当に仏を敬うがごとく

すべし」の道理なれば、仏のごとく互いに敬うべし。

（374 松野殿御返事（十四誹謗の事）1989ページー1行）

そもそも、「仏法をがくする者は大地微塵よりおおけれども、まことに仏になる人は爪上の土よりもすくなし」

（385 三沢抄 2011ページー1行）

毒薬変じて薬となる。妙法蓮華経の五字は、悪変じて善となる。

（389 内房女房御返事 2033ページ－13行）

我らが心の内に父をあなずり母をおろかにする人は、地獄その人の心の内に候。譬えば、蓮のたねの中に華と菓とのみゆるがごとし。仏と申すことも、我らが心の内におわします。譬えば、石の中に火あり、珠の中に財のあるがごとし。

（390 十字御書 2036ページ－12行）

法華経を信ずる人は、さいわいを万里の外よりあつむべし。影は体より生ずるもの。法華経をかたきとする人の国は、体にかげのそうがごとくわざわい来るべし。法華経を信ずる人は、せんだんにこうばしさのそなえたるがごとし。

（390 十字御書 2037ページー9行）

たとい、心おろかに、すこしきの物なれども、まことの人に供養すればこう大なり。いかにいわんや、心ざしありて、まことの法を供養せん人々をや。

（393 衆生身心御書 2047ページー3行）

願わくは、我が弟子等、師子王の子となりて、群狐に笑わることなかれ。過去遠々劫より已来、日蓮がごとく身命をすてて強敵の科を顕す師には値いがたかるべし。

（394 閻浮提中御書 2048ページー13行）

いのちと申す物は、一切の財の中に第一の財なり。「三千界に遍満するも、身命に直するもの有ることなし」

説

ととかれて、三千大千世界にみてて 候 財も、いのちには

替

かえぬことに 候 なり。

（397 白米一俵御書 2052ページ-9行）

南無と申すはいかなることぞと申すに、南無と申すは天竺

言葉

のことばにて 候。漢土・日本には「帰命」と申す。帰命と

申すは、我が命を仏に 奉 ると申すことなり。

（397 白米一俵御書 2052ページ-13行）

仏になり候ことは、凡夫は志と申す文字を心えて仏になり候なり。

（397 白米一俵御書 2053ページ－5行）

日本国の人々は、多人なれども、体同異心なれば、諸事成ぜんことかたし。日蓮が一類は、異体同心なれば、人々すくなく候えども、大事を成じて一定法華経ひろまりなんと覚え候。悪は多けれども、一善にかつことなし。

（398 異体同心事 2054ページ－17行）

諸経は随他意なり。仏、一切衆生の心に随い給う故に。
法華経は随自意なり。一切衆生を仏の心に随えたり。
（399新池殿御消息2059ページー6行）

たまたま法華経を信ずるようなる人々も、世間をはばかり
人を恐れて、多分は地獄へ堕つること不便なり。
（399新池殿御消息2058ページー15行）

うれしきかな、末法流布に生まれあえる我ら。かなしきかな、今度この経を信ぜざる人々。そもそも、人界に生を受くるもの、誰か無常を免れん。さあらんにとっては、何ぞ後世のつとめをいたさざらんや。

（400 新池御書 2062ページー6行）

始めより終わりまで、いよいよ信心をいたすべし。さなくして、後悔やあらんずらん。譬えば、鎌倉より京へは十二日の道なり。それを十一日余り歩みをはこびて、今一日に成

って歩みをさしおきては、何として都の月をば詠め候べき。

（400新池御書2063ページー13行）

雪山の寒苦鳥は、寒苦にせめられて、夜明けなば栖つくらんと鳴くといえども、日出でぬれば、朝日のあたたかなるに眠り、忘れて、また栖をつくらずして一生虚しく鳴くことをう。一切衆生もまたまたかくのごとし。

（400新池御書2064ページー8行）

この経の信心と申すは、少しも私なく、経文のごとくに、人の言を用いず、法華一部に背くことなければ、仏に成り候ぞ。

（400 新池御書 2067ページー17行）

有解無信とて、法門をば解って信心なき者は、さらに成仏すべからず。有信無解とて、解はなくとも信心あるものは、成仏すべし。

（400 新池御書 2068ページ－10行）

構(かま)えて構(かま)えて、所領(しょりょう)を惜(お)しみ、妻子(さいし)を顧(かえり)み、また人(ひと)を憑(たの)んであやぶむ(危)ことなかれ。

ただひとえに思(おも)い切(き)るべし。今年(ことし)の世間(せけん)を鏡(かがみ)とせよ。そこばくの人(ひと)の死(し)ぬるに、今(いま)まで生(い)きて有(あ)りつるは、このことにあわん(遭)ためなりけり。

（404 弥三郎殿御返事(やさぶろうどのごへんじ) 2085ページ－6行）

日蓮、いかなる不思議にてや候らん、竜樹・天親等、天台・妙楽等だにも顕し給わざる大曼荼羅を、末法二百余年の比、はじめて法華弘通のはたじるしとして顕し奉るなり。

（405 日女御前御返事（御本尊相貌抄）2086ページー14行）

かかる御本尊を供養し奉り給う女人、現在には幸いを招まねき、後生には、この御本尊、左右前後に立ちそいて、闇に灯のごとく、険難の処に強力を得たるがごとく、かしこへまわりここへより、日女御前をかこみまぼり給うべき

なり。

（405 日女御前御返事（御本尊相貌抄）2087ページ－13行）

この御本尊全く余所に求むることなかれ。ただ我ら衆生の法華経を持って南無妙法蓮華経と唱うる胸中の肉団におわしますなり。これを九識心王真如の都とは申すなり。

（405 日女御前御返事（御本尊相貌抄）2088ページ－1行）

曼陀羅というは天竺の名なり。ここには、輪円具足とも功徳

聚とも名づくるなり。

この御本尊もただ信心の二字におさまれり。「信をもって入ることを得たり」とは、これなり。

（405日女御前御返事（御本尊相貌抄）2088ページー3行）

日蓮が弟子檀那等、「正直に方便を捨つ」「余経の一偈をも受けず」と無二に信ずる故によって、この御本尊の宝塔の中へ入るべきなり。たのもし、たのもし。

（405日女御前御返事（御本尊相貌抄）2088ページー5行）

南無妙法蓮華経とばかり唱えて仏になるべきこと、もっとも大切なり。信心の厚薄によるべきなり。

仏法の根本は信をもって源とす。

（405 日女御前御返事（御本尊相貌抄）2088ページ－8行）

法華経をば経のごとく持つ人々も、法華経の行者を、あるいは貪・瞋・癡により、あるいは世間のことにより、あるいはしなじなのふるまいによって憎む人あり。これは法華経

を信ずれども信ずる功徳なし。かえりて罰をかぼるなり。

（406 日女御前御返事（嘱累品等大意の事）2093ページー1行）

聖人をあだめば、総罰一国にわたる。また四天下、また六欲・四禅にわたる。賢人をあだめば、ただ敵人等なり。今、日本国の疫病は総罰なり。定めて聖人の国にあるをあだむか。山は玉をいだけば草木かれず。国に聖人あればその国やぶれず。

（406 日女御前御返事（嘱累品等大意の事）2094ページー2行）

日女御前の御身の内心に宝塔品まします。凡夫は見ずといえども、釈迦・多宝・十方の諸仏は御らんあり。日蓮またこれをすいす。あらとうとし、とうとし。

（406 日女御前御返事（嘱累品等大意の事）2096ページ－12行）

日蓮幼少の時より仏法を学し候いしが、念願すらく「人の寿命は無常なり。出ずる気は入る気を待つことなし。風の前の露、なお譬えにあらず。かしこきも、はかなきも、老い

たるも、若きも、定め無き習いなり。されば、まず臨終のことを習って後に他事を習うべし」

（408 妙法尼御前御返事（臨終一大事の事）2101ページー11行）

法華経は実語の中の実語なり。真実の中の真実なり。

（408 妙法尼御前御返事（臨終一大事の事）2102ページー14行）

白粉の力は、漆を変じて雪のごとく白くなす。須弥山に近づく衆色は、皆金色なり。法華経の名号を持つ人は、一生

乃至過去遠々劫の黒業の漆変じて白業の大善となる。いおうや、無始の善根、皆変じて金色となり候なり。

（408 妙法尼御前御返事（臨終一大事の事）2103ページ－1行）

謗法と申す罪をば、我もしらず、人も失とも思わず、ただ「仏法をならえば貴し」とのみ思って候ほどに、この人も、またこの人にしたがう弟子檀那等も、無間地獄に堕つることあり。

（409 妙法比丘尼御返事 2107ページ－7行）

釈迦仏の御敵、いかなる智人・善人なりとも、必ず無間地獄に堕つべし。

（409 妙法比丘尼御返事 2112ページ－10行）

叶い叶わぬは御信心により候べし。全く日蓮がとがにあらず。

（413 日厳尼御前御返事 2135ページ－8行）

水澄すめば月映うつる、風吹かぜふけば木揺ゆるぐごとく、みなの御心みこころは水澄みずのごとし、信弱しんのよわきはにごるがごとし、信心しんじんのいさぎよ潔きはすめるがごとし。

（413日蔵尼御前御返事にちごんあまごぜんごへんじ 2135ページ－9行）

寿量品じゅりょうほん なくしては一切経いっさいきょういたずらごとなる事なるべし。根無ねなき草くさは久ひさしからず。みなもとなき河かわは遠とおからず。親無おやなき子こは人ひとにいやしまる。詮せんずるところ、寿量品じゅりょうほんの肝心かんじん南無妙法蓮華経なんみょうほうれんげきょうこそ、十方三世じっぽうさんぜの諸仏しょぶつの母ははにて御坐おわしまし

候(そうら)え。

（421 寿量品得意抄(じゅりょうほんとくいしょう) 2143ページ－9行）

大事(だいじ)には小瑞(しょうずい)なし。大悪起(だいあくおこ)これば大善来(だいぜんきた)たる。すでに、大謗法(だいほうぼう)国(くに)にあり。大正法(だいしょうほう)、必(かなら)ずひろ広(ひろ)まるべし。各々(おのおの)なにをかなげ歎(なげ)かせ給(たも)うべき。

（423 大悪大善御書(だいあくだいぜんごしょ) 2145ページ－6行）

御書(ごしょ)を心肝(しんかん)に染(そ)め、極理(ごくり)を師伝(しでん)して、もし間(いとま)有(あ)らば台家(たいけ)を

聞(き)くべきこと。

（456日興遺誡置文(にっこうゆいかいおきぶみ)2196ページ-7行）

いまだ広宣流布(こうせんるふ)せざる間(あいだ)は、身命(しんみょう)を捨(す)てて随力弘通(ずいりきぐつう)を致(いた)すべきこと。

（456日興遺誡置文(にっこうゆいかいおきぶみ)2196ページ-9行）

時(とき)の貫首(かんず)たりといえども、仏法(ぶっぽう)に相違(そうい)して己義(こぎ)を構(かま)えば、これを用(もち)いるべからざること。

（456 日興遺誡置文（にっこうゆいかいおきぶみ） 2196ページ－14行）

法自（ほうおの）ずから弘（ひろ）まらず、人法（にんぽう）を弘（ひろ）むるが故（ゆえ）に、人法（にんぽう）ともに尊（たっと）し。

（457 百六箇抄（ひゃくろっかしょう） 2200ページ－15行）